東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2010年4月9日

心と理性の調和

親愛なるムスリムの皆様。イスラーム思想の伝統において、理性の重要性は常に議論されてきました。イスラーム哲学者たちをはじめ、様々な学派はそのの死活的な役割を主張し、時々その点において行き過ぎることもありました。一方で伝統的な考えを持つ一部の団体は、—その先頭に立っているのは神秘主義者ですが—理性の価値を軽視し、逆にあたかもその代わりになるものであるかのように、心の機能を優先しました。

まず理性は、アッラーが私たちに与えられた最も大切な恵みです。そしてそれは光であり、我々が導かれるための源であります。宗教上において責任が負われるために不可欠の条件の第一です。理性を拒否し、ただ伝えられている情報（伝承）に満足する者は、アッラーに創造された光から自分を避けることになります。聖クルアーンは、メッカの多神教徒をも、他のすべての人々をも、たびたび熟考へと招いています。例えば、啓示を詩人や予言者であるかのように理解し、さらには幽精と接することであるかのように思うことは、真に理性が決めたことではないということを説明する際、クルアーンでは次のように述べられています。「一体かれらの貧しい理解力がこう命じたのか、それともかれらは法外な民なのか。」[1] 理性は内面と外面（環境）からの障害に妨げられない限り、また逸脱してしまわない場合、真理に辿り着き、聖なる真実を理解することが出来ます。このことの一番の例として、預言者イブラーヒームの経験を思い出していただきましょう[2]

ムスリムの皆様。心について言えば、何よりもまず信仰は、心で根づきます。そこで根づかず、口先で言葉だけで表現されている信仰は、ただ偽善的な表現に他なりません。[3] さらに、慈しみと慈悲は心の特徴です。[4] 覆い隠され、封じられ、さらには鍵をかけられるのも心です。[5] また一方で「人の体には小さな肉塊がある。もしそれが良い状態であれば心身全体がよい状態となる。もしそれが悪い状態になれば、心身全体も悪い状態になってしまう。それは心である。」と述べられた敬愛する預言者（彼に平安あれ）は、心が急に大変きつい状態に落ち、変わってしまうことを示しています。心が腐敗した場合どれほど酷い状態となるかは、クルアーンで次のように表現されています。「ところがその後、あなたがたの心は岩のように硬くなった。いやそれよりも硬くなった。本当に岩の中には、川がその間から涌き出るものがあり、また割れてその中から水がほとばしり出るものもあり、またアッラーを畏れて、崩れ落ちるものもある。アッラーはあなたがたの行うことを、おろそかにされない。」[6]

ムスリムの皆様。心の最も優れている特徴は、理性の継続的な問いかけ対して冷静であり、強く結びついていることです。アッラーを知り、彼を身近に感じ、アッラーのために働き、アッラーのもとへと駆け寄り、聖なる真理を理解し、それを見出すものは心です。したがって理性は、幽玄会の知識等を実践し、それを確認するためには十分ではないということを明らかにすべきです。理性が到達できない事柄関して尋ねる者は、ちょうど鉄を冷たいうちに打つかのようです。理性は被造物であり、創造主について判断することは出来ません。

しかし実際には、理性と心の間には直接的に繋がりがあります。それらは常に相互に影響を与えると同時に、互いから影響をも受けています。この密接な関係を適切な方向を向かわせるためには、それらの機能が適切に用いられるように努力するべきです。そうすることによってのみ本当の幸福と成熟さに辿る着きことができます。

私たちに理性の恵みを与え、心に信仰を賜れたアッラーに感謝します。

---

[1] 第52章32節.
[2] 参照、第6章76-79節.
[3] 参照、第46章14節.
[4] 参照、第2章7節;第7章101節;第40章35節; 第１８章28節.
[5] 参照、第83章14節.

[6] 第2章74節.